

「共生」がより生まれる学校づくりを目指した教師の変容

～ESDにおける「保育の関わり」の可能性～

横浜市立みなとみらい本町小学校

上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科国際協力学専攻

堀江 加奈子

指導教官 丸山 英樹

〈研究の背景〉

都市部への人口増加により、多様な立場の人が共に暮らしていくために、「共生社会」必要であると言われている。「共生社会」とは、文部科学省によると、障害に関係なく、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様なあり方を相互に認め合える全員参加型の社会(文部科学省, 2012)である。そのように、人々の多様なあり方を認め合うためには、人と人とのつながりや関わり方が重要になってくる。本研究では、この「共生」を学校のカリキュラムに取り入れているスウェーデンの教育に着目していく。

スウェーデンの教育における「共生」について、戸野塚(2014)は、自分の価値観だけでなく、相手の価値観を尊重していくために、対話することが重要であると述べた。そして、対話を繰り返しながら、態度や行動に表していくことを理解し、そのような姿を目指している(戸野塚, 2014, p. 219)。また、戸野塚(2014)は、「共生」のカリキュラムを実現するための教師の役割について、教師が、他者との見解への共感性や寛容性を見せるモデルになることである(戸野塚, 2014, p. 165)と述べている。

小学校教諭が「共生」のカリキュラムでの役割である「他者への寛容さ」を意識化したり行動化したりすることが重要であると考えた。このような寛容性を身近に得られる方法として幼保小交流の「保育の関わり」を知ることと考え、幼保小交流を通じて得た「保育の関わり」から小学校教員が変容することは可能であると仮定した。そして、小学校教員が変容することにより、学校(全体)で「共生」が生まれやすくなる考えた。

そこで、本研究では、幼保小交流の「保育の関わり」に焦点を当てる。「共生」が生まれやすい学校づくりを目指した教師の変容を目指し、ESDの展開方法であるホールスクールアプローチを生かした「保育の関わり」の可能性を探る。研究対象である横浜市立M小学校は、開校以来6年に渡りESDを推進しており、本研究における対象に適している。なぜなら、ESDにおいても「共生」は重要な概念の一つであること、またESDにおける「ホールスクールアプローチ」の考え方により、「保育の関わり」を校内の教職員間で広く共有されていくことは、「共生」が生まれやすい学校づくりを目指した教師の変容を追っていくのに適しているからである。

具体的には、本研究を通して、2つのことが明らかにする。1つ目は、幼保小交流の中から小学校教員は、「保育の関わり」を理解することができるのか。そして2つ目に、「保育の関わり」を得られた小学校教員は、「共生」を志向した意識変容や行動変容をすることができるのかという2点である。

<研究目的>

本研究の目的は、幼保小交流を通じて、小学校教員が、どのように変容するかを明らかにすることである。目的を達成するため、小学校教諭を対象にした研修を実施し、その前後の意識、行動の変化を分析する。特に、「共生」が生まれるために必要である教師の役割の一つとされる「他者への共感性と寛容性」が小学校教員の中に意識され、意識変容、行動変容へと繋がっていくかということに注目する。研究する対象として、3つの条件を満たすことが必要であると考えた。①「共生」を必要としている小学校であること、②変容する要因として「保育の関わり」を知ることができること、③ESDを実践している学校ということである。そして、横浜市立M小学校は、この条件に一致している。

研究にあたり、「共生」を国家カリキュラムに導入しているスウェーデンの基礎教育を分析する。それは、スウェーデンのカリキュラムの中で、「共生」がすべての教科や教師により実現してされていて、この点は、ESDのホールスクールアプローチの考えに類似しているからである。

<研究方法>

先行研究レビューにより、「共生」、そして共生を生むための教師の役割、そして、保育の関わりを知ることによる変容を整理した。そして、横浜市立M小学校にて、職員研修を行なった。職員研修では、研修前と研修後、研修4ヶ月後にアンケートを行い、研修によりどのような変容が見られたかを追跡調査した。研修内では、保育士と共に、園児が小学校訪問した時の様子の一部を映像にし、小学校教諭に見てもらった。研修の途中で、「保育の関わり」について、保育士と小学校教諭の関わりの違いを意識化させ、ディスカッションを行った。その中でグループでの発言や全体での発表をまとめ、結果や考察に使用した。なお、この報告書では、先行研究レビューについては割愛する。

<結果>～①研修後アンケート～

研修後（直後）のアンケートから、「園児が来校する時に見てみたいか」という質問に対し、何らかの方法で一度以上は見たいという意見が回答者全員から出された。また「教師と保育士の関わり」についての自由記述の項目では、「(保育士のしていたように)子どもたちに選択肢を与えるよう、自分の声かけを見直そうと思った。」「教師の関わりが、多様性の理解を創り出すことに大きく関係していることに気づいた」「保育士は、見守る（あえて声をかけない）関わり方をたくさんしていた」など、保育士の関わりや声かけが普段の自分の関わりや声かけと違うことを感じることができていると分かった。これは、戸野塚(2014)の言う「他者との見解への寛容さを見せること」と言う「共生」のカリキュラムでの教師の役割の重要性を小学校教諭も感じ取っていると考えられる。

研修を通じて、今後意識したいことに対して、自分の普段の関わりや声かけが全体への指示的な言動になっていることに気づき、子どもに寄り添うことや一人ひとりあった声か

けをしたいという結果があった。ここから、保育士の子どもへの関わりは、自分たち小学校教諭に比べて、寛容的であったり、共感的であったりすることを認識していると分かる。また、「子どもへの質問に、すぐに答えるのではなく、子どもが考えるような問い返しをしたい。」と述べていることから、教師の知識、価値観を教えるのではなく、子どもの価値観を尊重するために、子どもに思考させる余白をもたせる必要があることに気づいていると分かる。

〈結果〉 ～②行動変容アンケート（研修4ヶ月後に実施）～

研修での学びの効果に継続性があるかを確かめるために、研修から4ヶ月後に、行動変容アンケートを行なった。このアンケートのねらいは、研修で学んだことがその後4ヶ月の間で、意識化されていたか、研修直後の意識変容を行動に移せたどうかを分析するためである。行動変容アンケートには、15名の教職員からの回答を得ることができた。まず、この行動変容アンケートの総数の結果を分析・考察し、さらに5名の教職員に対し、半構造化インタビューを行い、内容を考察した。

行動変容アンケートでは、「保育の関わり」に気づく（小学校教諭と保育士の声掛けに違いがあるか）という質問に対して、92.2%が違いを感じたと答えている。また「保育の関わり」を知ることで、小学校教諭の学びにつながるかという質問に対し、「とてもそう思う」、「そう思う」を合わせると、全員から肯定的な回答を得ることができた。ここから、「保育の関わり」は、小学校教諭と関わりと違いがあり、「保育の関わり」のもつ共感性や寛容性は、小学校教諭にとって、学ぶ価値のあるものであると認識することができた。

半構造化インタビューの中で、2年生担任教諭は、保育士は、自分よりも子どもに行動を委ねた問いかけをしていた、という気づきがあった。そこから、自分の行動を振り返り、今までの指示的な言い方から、子どもに委ねるように試みたそうだ。すると、子どもが自主的に考える姿を見ることができたと子どもの成長を感じられたことが分かった。

〈結論〉

研究目的の中で述べた2点について結論を述べる。①幼保小交流の中から小学校教員は、「保育の関わり」を理解することができるのか。②保育の関わりを得られた小学校教員は、「共生」を志向した意識変容や行動変容をすることができるのかについてである。

まず、小学校教員は、「保育の関わり」を理解することができるのかという点について、職員研修内でのディスカッション、事後アンケート、行動変容アンケートで、「保育士の関わり」の違いや価値に気づき、理解することができていた。それは、事後アンケートの中で、保育士は、子どもに考えさせるような問いかけをしているなど子どもに寄り添う姿勢があったことを認識していたと分かる。認識しているということから、「保育の関わり」を理解し、得られたと言える。また、4ヶ月後の行動変容アンケートにて、「保育の関わり」を知ることは価値があると回答者の全員が答えていることから、自分たち小学校教諭との

違いや保育士の共感性や寛容性などに価値を見出していることが分かった。

その上で、2点目の「保育の関わり」を得られた小学校教員は、意識変容や行動変容をすることができるかという点について、研修後アンケートから、小学校教師の意識の変容を見ることができた。ここでの変容は、自身（小学校教諭）と保育士との関わりの違いに気づき、保育士の子どもの関わりの方を感ずているところである。この気づきが、より寛容性を持たせ、一人ひとりに寄り添った言動にしていきたいという意識変容を導いたことが研修後アンケートから明らかになった。また、子どもからの質問などの答え方についても、どのようにすれば、子どもの思考がより深まるかという視点で考えることができていることから、子どもの主体性を重視させる意味を感じることができていると言える。そこから、自分の言動を変えたりしようと意識化することができていることが分かる。

その後の行動変容アンケートにおいて、実際に、「保育の関わり」のように、子どもに質問された時に、選択肢、自分で考えるような返答を試し、その良さを感ずることができたという結果があった。つまり、意識変容だけで終わらずに行動変容に繋げることができた教師もいたということである。

この研修を通して、「保育の関わり」を意識しようというきっかけになったことは大きな価値があると言える。本研究の限界として、幼保小交流は、小学校の児童、幼保側の園児や保育士、スムーズな接続、子どもたちの保護者など様々な立場にも恩恵があるとされるが、ここでは、小学校教員の変容だけを追った。そして、研究する中で、「保育の関わり」に価値を感ずてもらえたものの、それを学ぶための時間をどのように確保するのが課題として挙げられる。

<参考文献>

- 1) 秋田喜代美/第一日野グループ(2013), 『保幼小連携 育ち合うコミュニティづくりの挑戦』ぎょうせい
- 2) 小関周二・谷口芳生(2016), 『共生社会 I ー共生社会とは何かー』農林統計出版
- 3) 酒井朗(2011), 『保幼小連携の原理と実践』ミネルヴァ書房
- 4) 清水益治/森敏治(2013) 『0～12歳児の発達と学び』北大路書房
- 5) 戸野塚厚子(2014), 『スウェーデンの義務教育における『共生』のカリキュラムー“samlevnad”の理念と展開』明石書店
- 6) 藤崎亜由子ほか(2023), 『保育に活かす SDGs /ESDー乳幼児の権利と参画のためにー』かもがわ出版
- 7) 文部科学省(2021), 「持続可能な開発のための教育（持続可能な開発のための教育(ESD) 推進の手引）」
<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>
- 8) 文部科学省(2012), 「共生社会」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325884.htm